

アフリカの健康未来を熱く語る対話集会

12月2日（日）16:30-18:30

5号館 5101 教室

団体名：アフリカ健康フォーラム（主催：東京女子医大&アフリカ日本協議会）

世話人：杉下 智彦（東京女子医大）

電話／03-5269-7421 FAX／03-5269-7422 mail／sugishita.tomohiko@twmu.ac.jp

想定参加人数：70名

「アフリカの水を飲んだ人は、再びアフリカに帰ってくる！！」

アフリカ健康フォーラム（主催：東京女子医大&アフリカ日本協議会、協力：HANDS、ジョイセフ）では、昨年11月よりアフリカで活躍する専門家や起業家、協力隊などの皆さんに現場の様々な取り組みについてお話を頂き、アフリカの健康未来を話し合ってきました。自由集会では、アフリカで奮闘する学生・医療従事者・専門家・コンサルタント・起業家・科学者などのリソースパーソンとともに、フィッシュボウル&ワールドカフェ形式で熱く語り合います。話題も、UHC、感染症撲滅、パンデミック、母子保健、NCD、NTD、水と衛生、ソーシャルビジネス、ICT革命、ベーシックインカム、フィスチュラ、妖術、儀礼など、限界はありません。21世紀の健康大陸「アフリカ」について、私たちの叡智と経験を結集し、素晴らしい未来を創造するための対話の場にしましょう。ネットワークを兼ねた懇親会も予定していますので、奮ってご参加くださいませ！

人道的危機と母子保健

12月2日（日）16:30-18:30

5号館 5102 教室

団体名：国境なき医師団日本

世話人：鈴木 基

電話／095-819-7842 FAX／095-819-7843 mail／mosuzuki@nagasaki-u.ac.jp

想定参加人数：70名

国境なき医師団は、世界中で、紛争や情勢不安によって人道的に危機状況におかれている人たちに、医療支援、人道支援を行っている。こうした状況下では、とくに妊産婦と新生児の健康被害のリスクは高く、さらに医療資源の不足、複雑な社会要因から、適切な支援の遂行には大きな困難がともなう。

本集会では、人道的危機下における安全な中絶ケア、新生児ケア、ワクチン接種など、国境なき医師団が、世界各地で行っている母子保健プロジェクトの実際を紹介し、今後の国際的な取り組みのあり方について、参加者とともに意見交換をしたい。

私たちには世界と未来を変える力がある ：東京オリンピックに向けた看護の取り組み

12月2日（日）16:30-18:30

5号館 5206 教室

団体名：国際地域看護研究会

世話人：那須 潤子、梅田 麻希

電話／090-1905-5170 mail／nasu@kyotogakuen.ac.jp

想定参加人数：60名

国際的な人・モノ・技術の流れや国際政治のパワーバランスが急変している現代社会において、日本の保健医療は大きな転換期を迎えている。急増する来日外国人に対する医療サービスや外国人ナースの登用、感染症やテロなどの国際的な健康危機への対応など、従来のシステムや教育では対応が困難な課題に新しい発想と行動が求められている。保健医療従事者の中で最も大きな割合を占める看護職は、グローバル化する日本の健康課題にフロントラインで対応してきた。本自由集会では、東京都保健医療公社、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会より講師を招き、国際的なマスギャザリングの様相を呈する東京オリンピックへの看護の取り組みを例に、看護が果たすべき役割についてディスカッションを行う。9割近くが女性である看護職にフォーカスすることで、グローバルヘルスに対する女性の貢献とその新たな可能性についても考える機会としたい。

2019年G20大阪サミットでの首脳会議および保健大臣会合に対して、 研究者として、どのようなUHC政策を提言すべきか

12月2日（日）16:30-18:30

5号館 5202 教室

団体名：独立行政法人国際協力機構 JICA 研究所、早稲田大学国際学術院

世話人：牧本 小枝、勝間 靖

電話/03-3269-3205（直通）FAX/03-3269-2054 mail/Makimoto.Saeda@jica.go.jp

想定参加人数：45名

2019年に日本はG20の議長国を担います。G20では、その開催に向けて経済界、市民社会、若者など各立場から対話や政策提言などを行うため、エンゲージメント・グループが組織されます。その1つであるT20（Think20）は、国内外のシンクタンクが各種の政策課題について議論し、G20に対して政策提言を行っていきます。

2019年の大阪G20サミットでの首脳会議や保健大臣会合においてグローバルヘルスが議論される予定であることから、本集会では、研究者として、どのようなUHC政策をG20に提言すべきか、議論を深める機会とします。そこでの議論の成果の一部は、可能な限り、T20としての政策提言へ盛り込むよう努力したいと考えています。

大学や研究機関などシンクタンクに所属している教育・研究者にとどまらず、実務者、学生、どなたでもご関心のある多くの方々のご参加をお待ちしています。

ミャンマー・タイ国境での団体活動報告

12月2日（日）16:30-18:30

5号館 5205 教室

団体名：NPO 法人 メータオ・クリニック支援の会

世話人：小林 潤

電話/090-1026-0595 mail/support@japanmaetao.org

想定参加人数：35名

ミャンマー・タイ国境の医療の現状について考える-看護事業の取り組みと国境医療の課題-

NPO 法人 メータオ・クリニック支援の会（以下、当会）は、2007年よりタイとミャンマーの国境に位置するメソトで、ミャンマーからの移民や難民のための無料診療所「メータオ・クリニック」を支援する活動を行っています。http://japanmaetao.org/

7代目現地派遣員として2017年8月からのクリニックで活動を行っていた齋藤つばさ看護師が2018年9月に任期を終了し帰国予定のため、クリニックでの看護ケア事業、移民学校での保健活動など、現地での活動を踏まえ国境の医療の現状と課題についてご報告いたします。

また、8月に実施いたしました国境スタディツアー参加者による報告、当会代表の小林潤による講演、集会参加者の方との質疑応答や意見交換などの場を設けたいと考えております。

インフォーマルセクターへの医療保険の適用 ～ 日本の経験と東アジア諸国の取り組み

12月2日（日）16:30-18:30

7号館 7308 教室

団体名：国立国際医療研究センター

世話人：明石 秀親

電話/03-3202-7181 FAX/03-3205-7860 mail/hakashi@it.ncgm.go.jp

想定参加人数：30名～40名

東アジア諸国では社会保険方式により UHC を目指す国が多いが、多くの課題に逢着し、最大の課題は、女性を含む農民、自営業者、無業者等インフォーマルセクター（以下、IFセクター）への適用という問題である。すなわち、被用者（フォーマルセクター：以下、Fセクター）の場合は雇用を通して保険関係が成り立ちうるが、IFセクターでは保険関係が成立する契機を見出せず、被保険者の管理が難しい。また社会保険も、保険料の賦課徴収が必要で、Fセクターでは賃金を対象に保険料の賦課や源泉徴収もできるが、IFセクターでは、所得の捕捉自体が難しく源泉徴収もできないため保険料の適正な賦課徴収が難しい。

本集会では、①Fセクターは社会保険方式だが、IFセクターは事実上税方式を行うタイ、②IFセクターも社会保険方式を採用し、2019年度中のUHC実現を目指すインドネシア、③IFセクターは任意加入とし、漸進的に加入促進を図りUHCに近づくことを目指すベトナム、④社会保険方式によるUHCの達成を掲げつつ、Fセクターを含め税方式に近いカンボジア、⑤安価な民間医療保険の普及等によりIFセクターの適用拡大を模索するインド、の5国を取り上げ、各々の具体的な課題と、日本の経験から各国に対する政策的示唆の導出を目指し、検討する。

国際学校保健の実践と研究の推進のためのネットワークの活用

12月2日（日）16:30-18:30

7号館 7309 教室

団体名：国際学校保健コンソーシアム

世話人：友川 幸

電話/090-7129-4156 mail/sachitjp@shinshu-u.ac.jp

想定参加人数：30名

本集会では、「国際学校保健の実践と研究の推進のためのネットワークの活用」をテーマに、①国際学校保健コンソーシアム)の活動紹介、②自由集会の参加者間での情報共有、③国際学校保健のネットワークを生かした事業の可能性の検討を行う。①では、現在、コンソーシアムが年に1回、諸外国の団体と共同で、企画・運営しているアジアやアフリカの学校保健行政の担当者や研究者を対象とした学校保健国際研修について紹介する。また、日本の学校保健を生かした支援の在り方を提案する共同研究や国際的な学校保健研修の推進のためのネットワーク構築（UNESCO Chair）について紹介する。②では、ラウンドテーブル形式により、参加者間で研究・関心分野について共有し、ネットワーク構築の機会とする。③では、参加者と一緒に、学校保健のネットワークの活用方法、本コンソーシアム内外での連携の可能性について、ワークショップ形式で議論する。

国際栄養ワークショップ「国内の健康格差から国際保健を考える」

12月2日（日）16:30-18:30

7号館 7310 教室

団体名：国際栄養拠点ネットワーク検討会

世話人：三好 美紀（青森県立保健大学）、石川 みどり（国立保健医療科学院）

電話/017-765-4147 fax/017-765-4147 mail/m_miyoshi@auhw.ac.jp

想定参加人数：30名

途上国における栄養問題とその解決に向けた取り組みへの関心が高まっている中、我々はこれまで本学会自由集会にて栄養分野の国際協力活動および人材確保等の仕組みづくりに係る課題検討を行ってきました。

現在、日本を含む国際社会は「誰一人取り残さない（Leaving no one left behind）」を合言葉にした「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）」に向かって進んでいます。特に、国際保健の分野では世界における健康水準、保健医療にみられる国・地域的な違いや格差の是正に向けた取り組みが進められています。このような状況の下、今回の自由集会では、わが国の健康格差の現状と課題について、お二人の先生方から話題提供いただき、国内外の健康・栄養格差の解決に向けた取り組みについて活発な意見交換を行うことを目指します。更に、今回の議論を次回の本学会東日本地方会につなげたいと思います。

<話題提供>

1. 吉池 信男

（青森県立保健大学大学院健康科学研究科 教授 2019年日本国際保健医療学会東日本地方会・大会長）

2. 藤原 武男

（東京医科歯科大学大学院（国際健康推進医学分野）教授）

在日ラテンアメリカ人の生活支援問題

12月2日（日）16:30-18:30

7号館 7311 教室

団体名：NPO法人MAIKEN

世話人：三浦 左千夫

電話/090-2566-6485 FAX/035-930-8374 mail/ miurask@gmail.com

想定参加人数：30名

DEKASEGI（出稼ぎ）から在日ラテン定住者と早くも28年を経過、我が国の経済成長に乗じ、自動車、通信、家電、建設関連のラインでの労働力不足を補うべく、南米諸国から日系家族が就労目的で来日した。その間に阪神大震災、リーマンショック、東日本大震災などなど、大変な諸事情を乗り越え定住化を決めたラテンアメリカ人は多い。その平均在日歴は23年になる。その間新家庭を築き、異文化教育問題に取り組み、日本の文化に馴染み順化出来た者、馴染しきれずに母国に帰国したが、子供は日本語に馴染み、母国語に不慣れのために母国での教育に馴染めず、再入国の形で日本へ帰国と、二国の狭間で、子供の教育問題、家族の就業、医療問題など多様な生活問題が浮き彫りにされてきた。南米特有の病気、高齢化対策、教育問題対応について在日ラテンアメリカ人の現状を紹介し、今後益々増加する日系4世時代の到来に備えたい。

グローバルエイジングへの国境なき挑戦

12月2日（日）16:30-18:30

7号館 7405 教室

団体名：Global Ageing Study Group: GASG

世話人：山本 秀樹、増田 研、林 玲子、田宮 菜奈子

電話/090-7890-4245 mail/hideki-yamamoto@umin.ac.jp

想定参加人数：30名

世界各地で保健医療が改善し、乳幼児死亡率が下がり、平均寿命の伸びにつながった。一方で出生率低下、高齢者人口割合の増加が先進諸国のみならず発展途上国でも起こっている。我々の研究グループ(Global Ageing Study Group: GASG)は2012年以来、本学会の自由集会においてGlobal Ageingに関する研究会を実施してきた。

近年アジア諸国の高齢化問題はかなり知られることになったが、アフリカの高齢化の問題についてほとんど知られていない。本年は、アフリカ諸国の高齢化の実情と未来について増田研 先生に報告していただき、参加者の間で意見交換を行う。

「人間のお産」プロジェクトとは何だったのか？

12月2日（日）16:30-18:30

7号館 7406 教室

団体名：独立行政法人国際協力機構（JICA）

世話人：高橋 優子

電話/03-5226-8375 FAX/03-5226-6341 mail/ Takahashi.Yuko@jica.go.jp

想定参加人数：30名

2018年2月にWHOは「肯定的な出産体験のための分娩期ケア」ガイドラインを発表し、女性の人権や女性中心のケアの重要性が強調された。これに先駆けて、JICAはこれまで世界7か国で、通称「人間のお産」と呼ばれる出産と出生に焦点を当てた技術協力プロジェクトを実施してきた。プロジェクト終了時には、科学的な根拠に基づくケアの実践、医療者の態度や倫理観の変化といった成果が確認されている。

本集会では、これまでJICAの人間のお産プロジェクトに関わった専門家やボランティアの方々とともに、それぞれの方、それぞれに国にとっての「人間のお産」とは何だったのか、またその成果は何だったのかについて議論を深め、その現代的な価値を掘り起こす機会としたい。

また、きくちさかえさんによる「光のプロジェクト」写真展を同時開催する。

母子保健に関心のある多くの方々のご参加をお待ちしております。